イメージの母子相互作用*

― 心因性頭痛をもつ女児のロールシャッハ・テストに反映した母子相互作用―

井　原　成　男**

はじめに

人間の心的世界の機能について吉本[2]は以下のようにのべている。

‥‥ぼくなんか，人間の基層心理というものを含めて，人間の観念の働きがもっている世界を大体三つに分けてかんがえるわけです。

そのひとつはどういうことかと云いますと，じぶんのじぶんに対する関係の世界，それはふつうの言葉で云えば，個人の，つまりじぶん自身の内面の世界の表現になっている，そういう世界というもの。もうひとつは，自分と他のひとりとの関係の世界。これは広い意味で云えば，性の世界だとかんがえます。(中略) 要するに，ひとりの人間がじぶん以外のひとりの人間と関係する世界が，性の世界だというふうにかんがえます。だからひとりの人間と他のひとりの人間のあいだに，もしなんらかの意味で交流があるとすれば，それも広い意味で，性の世界に含まれるということができるとおもいます。

(中略) もうひとつの理解の基軸は，ひとりの人間が共同の世界―社会という言葉でも国家という言葉でもなんでもいいんですけれども―でどういうふうに振るまうか，あるいはどういうふうな心の持ち方を持つか，そういうひとつのべつの基軸です。‥‥

ここでは，観念の働きが①個人的世界の次元(一者関係の世界) ②対的(つい)世界***の次元 (2者関係の世界) ③共同的世界の次元 (3者関係の世界) という3つの次元に分けて考えられている。人間の観念を3つの次元に分ける考え方は，そのまま"イメージ" についても応用し，当てはめてみることが可能であるように思われる。Fig. 1にこの3つの次元を図式化した。ところで，子どものもつイメージを母親が理解しようとする場合，母親はii)の対的世界のみを理解すればこと足りるわけではない。勿論，母と子の共生的世界においてはこの世界が最も自然に理解し易いものではあるが，それだけでは未だ不十分である。母親は子どものもつi)の個人的世界をも理解し共感することができなければならない。その結果，子どもの個人的世界は，母親との対的世界を通して無限にiii)の共同的世界へと社会化されていく志向性をもつようになると思われる。

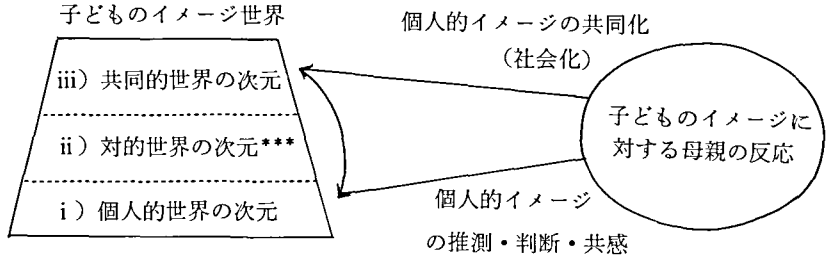

Fig. 1　イメージの3つの次元と母親の反応

そもそも，子どもが自らの反応(＝ロールシャッハ・カードに何を見たか) を言語化するプロセスの中には，イメージの個人的世界を，検査者という他人との対的関係を通して共同化していく方向が含まれている。したがって，この言語化された子どもの反応(＝イメージ) を母親が①検査者のヒントなしに自由に推測し，②検査者のヒントによって判断し，③検査者の説明によって共感(受容) していくという一連のプロセスは，そのような子ど

*本稿の一部は第24回日本教育心理学会で口頭発表した。"

**早稲田大学文学部 (長野大学産業社会学部)

*** 対隅 (＝pair) の意味で使用した。

ものイメージの社会化への意志をくみとり，補助していくというプロセスでもある。子どもの側の社会化への意志をひきだし，サポートしていくのに，母親は最も有利な位置にいる。母親は一人の成人として共同世界を十分に経験しており，また一方，子どもとの日常生活によって，子どもの個人的世界をかなり詳しく知っているからである。母親はしたがって，子どもの個人的世界を共同世界へと高めていく媒介者たりうるのである。

しかし，もしこの媒介的役割をとることに母親が失敗したり，その機能をなんらかの理由で発揮できなかった場合，母の代理者がいればよいが，そのような代理者が得られなかった場合，子どものイメージは個人的次元に留り，なかなか社会化されなくなってしまうのではないかと考えられる。

筆者の先の報告[3)〜6)]では，①イメージがコミュニケーションにおいて感情的な側面を伝えるのに大いに役立つという指摘はなされたが，②母親が子どもの反応（イメージ）をⅰ)推測しⅱ)判断しⅲ)共感できることが何故に大切なのかという考察はなされなかった。本稿では，母親が子どもの反応（イメージ）を理解できることによって，子どものイメージの社会化が促進されるという仮説に立って，子どものロールシャッハ反応に対する母親の推測能力について検討を加えていきたいと思う。

ここでもういちど，子どものロールシャッハ反応を母親に推測してもらう際の3段階について触れてみたい。まず，ⅰ)何もヒントを与えずに自由に推測してもらう段階(free response)，次に，ⅱ)反応内容（何を見たか）のみ教えてそれを説明してもらう段階(suggestion)，最後にⅲ)反応内容の領域，内容の細かい説明をしてそれが理解できるかどうかをみる段階（explanation）という3つの段階に分かれるわけである。ところで，先の報告[3)〜6)]の中では筆者はこのⅰ)〜ⅲ)の段階は連続した同質のものであり，同じ連続体上にあるものと思っていた。しかし，その後の経験によって，このⅰ)〜ⅲ)はそれぞれその質を異にしているのではないかと考えるようになった。それについて以下のべてみたい。

ⅰ)のfree responseの段階は，筆者が予想していた以上にむずかしかった。それが自分の子どもであるとはいえ，他者のイメージを推測していくことはむずかしいものなのであろう。母親は自分自身のロールシャッハ反応に頼って推測しているのだから，このⅰ)段階での推測の一致は推測能力や対人的理解能力，コミュニケーション能力の良し悪しではなく，"両者の資質の類似性（いいかえるならば個性の類似性）"を測っているのではないかと思う。つまり，母子がどれほどイメージ能力，内容において似ているかということを測っているのではないかと思われる。本稿ではこの一致度を数量化した。次にⅱ)のsuggestionについては，"他者（子ども）の反応パターンの推測能力"が測られているように思われる。つまり，母親は子どもが何をみたか(what)，さらにどこにみたか（where）をしることによって，子どもの反応パターンを推測し研究しているのではなかろうか？この段階で子どもの反応パターンに気づくのが早ければ早いほど，母親のⅱ)段階目での推測率は高くなると思われる。最後に，ⅲ)explnationの段階で測っているものは，"他者（子ども）の反応に対する母の共感・受容能力"であると考えられる。この段階は自分の子どもが何を（what）どこに（where）どのように（how）みたかをしることによって，その反応の非言語的意味（why）を共感・受容していく段階なのである。ここでは，子どものイメージを母親が受け入れられるかどうかという母の側の柔軟性が問われている。

この3段階におけるそれぞれの意味を，ここではこれ以上深めることができないが，筆者が先に考えていたような単純なものではなく，それぞれ質の違ったものであることは確かなようである。Table 1にそれぞれの段階で測っているものを図式化した。

Table 1　推測の3段階の測定している内容

		測定内容
ⅰ)	free response（推測）	両者の資質（個性）の類似性
ⅱ)	suggestion（暗示・ヒント）	他者（子ども）の反応パターンの推測（判断）能力
ⅲ)	explanation（説明）	他者（子ども）の反応への共感・受容能力

以上，①われわれの行動はイメージによって規定されており，②コミュニケーションのうち感情過程をになうものとしてイメージは重要な役割をもっているということ，さらに③母親が子どものイメージを個人的世界にまで深めて理解するということは，子どものイメージを社会化するために必要なことであるという3つの観点を踏まえて，心因性の頭痛をもつ女児の症例について詳しく報告したい。ロールシャッハ・テスト（以下ロ・テストと略す）については前報告と同じく，①子どもにロ・テストを施行し，つづいて②別場面で母にロ・テストを施行し，さらに③母に子どものロ・テストを推測してもらうという3つの手順にしたがった（筆者は先に報告したAnorexia Nervosa[3)4)]の女児をイメージのコミュニケーション能力からみて重度，さらに夜尿の男児[5)6)]を中度，そして本稿の症例を軽度として，次にノーマルな母子の反応をも含めて比較研究を行いたいと思っているが，それは次の機会に譲りたい）。

I．症　　例

症例：S・A，昭和45年7月4日生れ。10才，小5の女児。

主訴：頭が割れるように痛い。

診断：心因性頭痛（PSD）。

家族構成：父，母，兄（14才），祖母（天気予報よりよくあたるといわれる頭痛の持ち主。頭痛の時必ず雨になるという。S・Aの頭痛はこの祖母をモデルにしている可能性がある）。

現症歴：幼稚園時（入院6年前），園にいく時吐気を訴えたことがある。今回は小学校4年に進級した頃（入院1年前）より，「胸が苦しい」「頭が痛い」等の症状を訴え，近医を受診した。脳波異常を指摘され，投薬を受けたが改善がなかったので，精査目的のため筆者の勤務する大学病院に入院となった。現在に致るまで痙攣の既往はなく，家族歴では父方のおじが精神分裂病であった。入院時現症には特記すべきものはなく，血液検査でも異常を認めなかった。脳波検査では，やや不規則な基礎律動に時折，瀰漫性にirregular spike & wave complex，およびsharp & wave complex，高振巾δ波の群発を認め，HVでそれらの増強を認めた。Brain CT scanでは異常を認めなかった。入院中には症状の出現はなかった（実際には痛いこともあったが我慢していわなかったという）。病棟の主治医は以上の結果から，「幼稚園時代のエピソード，patient profile，近医よりの投薬で改善のないことから脳波異常と頭痛の関連性はないと考え心因性頭痛と診断する」と総括している。

生育歴：生下時体重3,400g，首の座り，ハイハイなどよく憶えていないが正常であったと思う。始歩1才，始語（よく憶えていない。普通だったと思う）。言葉の増加は順調であった。2才頃の質問はそれ程うるさくはなかったが多少はあったと思う。離乳は5～7ケ月頃から始め，大人と同じものを食べられるようになったのは1才頃（10～12ケ月の頃，柔らかいものだけ与えていたのを，家の商売が忙しかったのでオニギリにしてみたところ，すぐ食べられるようになった）。オムツが取れたのは1才過ぎ（夜も同時にとれた）。夜尿はなく，夜泣きもない子だった。3才頃の癇癪，自己主張もなく，大変ききわけのよい，大人しい子だった。幼稚園に3年間通った。1年目はよかったが，年中組の時より，父親が迎えに行くと怖がって泣いていたという。父親は二度と迎えに行かなかった。家族で出掛けた時も決して父とは手を繋がなかったという。小学校3年の頃から，先生に注意されたりすると，いつまでも憶えていた。特に先生に誤解された事はいつまでも心に残っていたようである。勉強に関してはそれ程頑張り屋ではないが，他の子が自分よりできるといつまでも残る方である。

眠っている間に指しゃぶりがある（こういった口唇的な欲求は次にのべるCATの中によく反映されている）。1年に3日程風邪で休むぐらいで，学校はほとんど休まない。時間割は前の日にきちんと揃えている。出掛ける前はトイレを気にする。とても几帳面。友人の数は普通。人の好き嫌いははっきりしているが，嫌いな子とも遊んであげられるという柔軟性もかねそなえている。

心理テストの結果について

知能テストは特に行わなかったが，学校の成績が中の上であることから判断してノーマルの範囲にあると思われる。PFスタディの結果からみると，外罰7％（−43％），無罰63％（+37％），自己防衛74％（+21％），要求固執17％（−11％）と非常

に極端な形ででている。総括していうと，外罰の少ない分，無罰が極端に多い(筆者の印象では，ヒステリー傾向の強い人に無罰の傾向が強いように思う)。また，自己防衛傾向が極端に強い。要求固執が少ないのは諦めのよさを反映しているのであろうか？

ところで先程，生育歴の欄でS・Aに指しゃぶりがあることについて触れた。この他にも，S・Aは①非常にお喋りである，②それにも拘らず，いつも自分は何か喋り足りないように思う，③家業の忙しさによる離乳の急速さにも速かに適応しているなど口唇欲求にまつわる性格行動やエピソードを多くもっている。この傾向がCATによく表れているので，以下，CATの反応をそのまま紹介しておく。

CAT（Bellack版）のプロトコル

カードI：子どもが食事をしたくて一生懸命待っている。小鳥（子ども）はスプーンをダンとたたいている。これ（母鳥）は早く食べなさいといっているが，お椀には何ものっていないので食べようとしても食べられない。最後は食べる事ができる。

カードII：熊が綱引きをやっている。こっちは力持ちだから一匹。こっちは強そうな顔をしているけど弱々しいので，小さいのが手助けしている。こっちが勝つ（Fig. 2）。

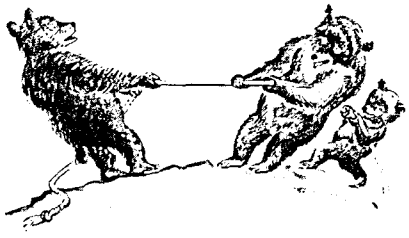

Fig. 2 CAT・IIカード（Bellack版）

カードIII：本当は象がこういう風な違そうな顔している（はず）。ライオンが象を殺して足組んで座っている。考えている。お金もらおうか，そんでなかったらケーキ食べようか？最後はケーキもらって食べちゃう。

カードIV：カンガルーがピクニックに行く。これ，大きいかんじだけど，足が折れて跳ねられないから自転車に乗っている。これから森へ行き，食べたり，踊ったりして楽しく過ごす。

カードV：まだ，熊が寝るベッドでこの小さいのは寝てない。これから寝たくてベッドに入る。子どもは寝ているけど，大人は起きてる。大きいから。これからベッドに入ってお菓子を食べている夢をみる。

カードVI：洞穴の中に熊が寝ている。この熊(子どもの熊)は病気でヨレヨレになっている。この(大人の)熊は死んでしまう。こっちのがお墓をつくって埋める。

カードVII：虎がお猿さんを食べようとしている。お猿は逃げようとしているが最後は食べられる。

カードVIII：ゴリラがお茶の会に呼ばれ，子ども連れできたので，お利口にするのよといっている。こっちは，あの人たちは子連れできて！と話している。怒って，この人たちをなぐっちゃったの。

カードIX：兎さんが病気でベットに寝ている。母さんが食べ物持ってくるから待ってなさいという。いいつけ通り待ってドアの方をみている。最後には母さんが食べ物持ってくる。

カードX：この小さいのがトイレに行きたいと思っているが一人ではできない。この犬（母）がちょっと待ってなさいという。最後にはちゃんとできる。母親がテレビを見ているので一人で頑張ってやったらできた。

CATの結果から分かることは，まず①10枚のカードのうち6枚のカードに"食べる"テーマが表われていることである。またその中に，食べるのを"待たされている（カードI，IX)"という形になっているカードのあることが注目される。S・Aの家は商売を営んでおり，食べる事に限らず待たされる場面が多かったのではないかと想像されるからである。後日，CATの反応をそのまま母親に見せたところ"食いしん坊だし，待たせる事が多かったものね"と述懐してくれた。但し，この6枚のカードは全て，"最後は食べる事ができる"という形になっていることからみて，S・Aの人生観はかなり陽性のものではないかと思われる。願望は終には叶うのだから。カードVの熊は夢の中でケーキを食べるということになっているのは，まさに夢の中での願望の実現であろう。ま

た，②残りのカードについては，カードIIが競争事態のテーマ，カードVIが死のテーマ，カードXが躾のテーマであるが，いずれも〝子ども〟が勝つ，埋める（処理する），一人でやるなど〝子ども〟の自立が強調されていることが特徴的である。ここでは子どもの側の過度の自立が要求され，また子どもの側ではそれをこなす能力を備えていることが注目されよう。③このことを裏づけるかのように残るカードVIIIでは，母が自分の用事に子どもを供っていき，お利口にすることを要求している。

以上の解釈はS・Aが語った事をそのまま母親に見せる過程の中から自然に浮んできたものである。S・Aの母親は，この後にも触れることになると思うが，治療者が多くを語らなくても，場合によっては治療者以上にS・Aの事を解釈するのがうまかった。S・AのCATを見せることで，S・Aへの母親の理解は，さらに具体的な内容をもって確実なものになったと思われる。

面接について

S・Aは退院後2，3日頭痛があったのみで，その後はまさに信じられないぐらい〝ケロリ〟と消失した。退院後3回面接したが，症状の再発は全く見られなかったので終了にした。1年後のフォローアップでもまったく正常である。以後1年に1回のフォローアップを外来にて受けることになっている。

入院中，あるいは退院後の母親とS・Aに対する面接から明らかになったのは次のようなことであった。

まず，筆者がS・Aと面接して最も印象深かったのは，S・Aがとても〝お喋り〟だという事である。時には速く喋ろうとして吃ることすらあった。このことは入院中，看護婦からも指摘され〝もっとゆっくり喋ったら上手に喋れるよ〟と注意されている。何故そんなにお喋りなのか聴いてみると，まわりから見る印象とは裏腹に，〝自分はいつも何か喋っていないという気がする〟という答が返ってきた（実際には機関銃のように喋っている）。自分の喋っていることがうまく伝っていないと思うと不安になるので身振り手振りを使って大袈裟に表現してしまうということだった。

これに関連して，S・Aは友人から注目されていないと不安だと語ってくれた。例えば絵を描くときも，工夫して面白く，みんなが笑ってくれそうなものを描くという。S・Aにロ・テストを施行した時にも，筆者が記録をとるのに合わせて喋っていた。ベラベラ喋っているように見えて，実はこちらの動きに自然に合わせていくという努力をしているのであった。S・Aの心の中には表面上の快活さと裏腹の微妙な繊細さがあるのだが，少し立ち入って聞いてみなければこの側面は見えてこない，そんな性質のものではないかと思われる。筆者はS・Aと話した後，何か興奮して疲れてしまった。その実，何を話してもらったかは憶えていなかった。S・Aのお喋りは，彼女特有の防衛機制だったのであろう。

S・Aは幼稚園の時，先生が怖かったこと，小1，小2の頃，産休の代理で男の先生が来たので職員室に見にいったら自分だけ叱られたこと，男の人で不良みたいな顔をしている人は怖いことなど語ってくれた。S・Aの生育歴の中に丁度幼稚園の頃から父親をひどく怖がり始めたということがのべられている。この父については現在も怖がっているが，父が酔って帰ってくると同情して構ってあげたりしているという。この父は自分に学歴がなかったために苦労しており，中2の兄に勉強しろと叱る。S・Aは兄が父親から叱られているのを聞いて，自分まで胸が苦しくなってくることがあるという。他人の事もまるで自分の事のように感じてしまう過度の共感性をS・Aは所有しているようである。このようなS・Aにしてみれば，怖い父親は同時にまた分かってあげなければならぬ弱い面も持ち合わせているが故に，余計に〝怖い〟存在なのではなかろうか，父親に対する怒りは父に対する家族的な同情心の故に余計に意識化されにくくなり，父に投影されていく結果，父の怖さを増大させていると思われる。しかし，それは決して病的な怖さではない。ロ・テストのIVカードをS・Aは父親カードに選び，その理由として，〝怖いけど，案外強くて頼りがいがある〟と現在では父親のポジティブな面を認め始めていると思われるからである。

S・Aの恐怖心はこのように，他人への思い遣りを内に含んだものである可能性が強い。生育歴の中で，離乳の時，母が忙しかったので，大人と同

じ堅いオニギリを食べさせたらすぐに食べられるようになったと語られているが，象徴的な出来事である。S・Aはこのように，相手の意に沿おうとする気持ちが幼少時から非常に強かったのではないかと推測される。加えて，そのようにできる能力を持ち合わせていたために，余計，この形はその後のS・Aの適応のパターンになっていったものと思われる。またそれは，S・Aの評価を高めるものでもあった。CATの中に，①〝食べる〟のをお預けくうが，最終的には食べられるというテーマと②自力で物事を処理できるというテーマが特徴的に表れているが，このことからも，以上の推測は，より確かになると思われる。

ところで，筆者がS・Aに〝心因性頭痛〟の説明している最中，S・Aは〝あっ，わかった〟といわんばかりに，〝心の中にたまっているのが頭にいっちゃったんでしょ！〟とのべたのであった。この物分かりのよさには筆者も驚いてしまったが，S・Aは確かにそんな気がするのだという。してみれば，S・Aの中には，何か自分の中に鬱積しているものが主観的に実感され始めていたといえるのかもしれない。

母親への資料の呈示

S・Aの母親への面接では，筆者は得られた資料をできるだけ生のまま母に返すというやり方を試みた。上述したように，CATなどの資料（S・Aの反応）から，母親は治療者が言葉で説明する以上のものを汲みとっていった。（後述するロ・テストの推測状況でもこれと同じことがおこった。筆者自身がよく分からなかったS・Aの反応を母が明細化してくれるというカードもあった）。S・Aの母親もS・Aに負けず劣らずのお喋りであり，しかも決して不快なものではなかった。話がとんとん拍子で発展していき，とても面白いのである。筆者はその事実も指摘し，あまり掛け合い漫才のように話すと本当に言いたいことが伝わらないので，もっとゆっくり聴いてあげてはどうかと提案してみた。筆者の言わんとすることを母親はまた持ち前のスピード理解で吸収してくれた。

退院してから約2ヶ月後の面接での母親の報告によれば，S・Aが「非常によく食べるようになった」こと，症状はまったく見られず，元気で通学しているとのことであった。退院から約1年後の面接時点でも症状は全く認められないということであった。母はS・Aとよく話し合うようになったので、本人の気持ちも満たされているのではないかという。

筆者はこの時点で母にロ・テストを施行し，そのあと，S・Aの反応を推測してもらった。したがって先の報告[3)〜6)]と違い，今回のロ・テストは直接治療的には使用されていない。ただ，この症例のように回復が速く，かつ子どもの反応に対する母親の理解がよかった症例で，ロ・テストの推測能力にも同様の理解のよさが見られるか否かを検討したいと思ったのである。

II．母子のロールシャッハ反応

母子のロールシャッハ反応について考察するための原資料としてプロトコルをそのまま記載した。

それぞれのカードについて，本人の反応，母親の反応の順に示した。母の反応については≪M≫で示した。自由反応段階については（Per.），質疑段階については（Inq.）と略記した。領域はクロッパーら（Klopfer & Davidson）[7)]に従い（ ）内に記してある。ロ・テストの施行日時はS・A（昭和55年10月31日），母（昭和56年12月11日）である。

〔カードI〕

①（Per.）＜ 15″　エーッ，ウーン……チョウチョ。（Inq.）羽みたい（D_2）。花にとまっているチョウチョ。目（d_5），これはシッポ（d_6）っていうか，あとはない。30″

W　FM±　A　P

≪M（母親の反応）≫

①（Per.）10″ ∧　蝶々っていえば可愛いけど

蛾。昆虫みたいなかんじね。カブト虫は見えないね。あとは見えない。(Inq.) くるみの木につく害虫に似ている。ここあたり (d_3, d_5) 可愛くない。全体的に蛾が羽を拡げているように見える。1′5″

W　FM±　A　P

〔カードII〕

①(Per.)　30″　<　コウモリ (W−D_2)。(Inq.) ゲジゲジコウモリ。ここがギザギザしている(D_1)。(記録しているのを見ている。)　ここが平らっていうか，ペチャンコ。　羽みたい(D_3)。(どんな?)やっぱ，暗いとこ洞窟，そういうところに留っている。

D　FM∓,K　A　Na

②(Per.) < ナメクジ。(Inq.) くねっているナメクジ (D_2)。くねって遊んでいる (踊っている)。

D　FM±　A

≪M≫

①(Per.) 15″ ◎ ∧　象さんが鼻でもって合わせている。象さんとも熊さんとも (とれる)。象さんに似ている。(Inq.) ここ (d_1) 鼻で，ここ目らしいものがある。ここ耳，足(d_2, d_3)。立っているよう。縫いぐるみを立たせたように見える。

D　FM±　(A)　P

②(Per.) ∧ 白いところ(S)パッと見ると電気みたいにも見える。(Inq.) ランプ，上から下っている。これコード，ここ傘。1′5″

S　Fm±　Obj

〔カードIII〕

①(Per.) 20″ ∧　鳥 (W−D_2)。(Inq.) ここととこ (D_8) 鳥。向き合っている鳥。この (D_1) チョウチョを食べようとしている。話している。

D　M±　A・P

②(Per.) ∧　ダチョウ。(Inq.) ダチョウが背伸びしている(D_2) (頭の中で逆さにして見ている)。(どんな?) 細いダチョウ。50″

D　FM+　A

≪M≫

①(Per.) 15″ ∧　家鴨さんみたいな恰好。(Inq.) お話してるってことないけど，いくらか人間的にアレンジされた，顔 (d_2) とこっち (D_7) みて，アニメ的な家鴨をみた。40″

W　F∓　(A)

〔カードIV〕

①(Per.) 10″ ∧　カイジュウ。(Inq.) 足 (D_3) が大きくてカイジュウみたい。ここ顔 (d_2)，手 (d_1)，足(D_3)，身体。(どんな?)タヌキのカウジュウ。顔がタヌキみたいな形。

W　F±　(A)

②(Per.) ∧　タヌキのつぶされたの。(Inq.) これ(d_2)が顔で，もっと身体小さいんだけど，自動車につぶされた。生きたタヌキだとこんなに下が広くない。45″

W　F±　A

≪M≫

①(Per.) 15″ ∧　動物の敷皮みたい (皮の敷物)。(Inq.)なんていう動物かは分からないが，動物の

皮のよう。頭(D_1)，足。伸ばしたかんじ。尻尾(d_2)。表の方を上から見ている。55″

W　Fc±, FK, Fm　Aobj　P

〔カードV〕

①(Per.) 30″ ∧　チョウチョ。(Inq.) 羽(D_1)，目，シッポ(d_1)。(どんな?)飛んでるチョウチョ，ここ(d_1)がとぎれて，こう羽がなっているから，やっぱりチョウチョ。45″

W　FM±　A　P

≪M≫

①(Per.) 3″ ∧ 蝙蝠みたい，ナメクジみたいではないし。(Inq.) 羽の形が。後から見て。前から見ると蝙蝠でないようだが，蝙蝠が足(d_1)を伸ばして飛んでいくのを後から見た。25″

W　FM±, FK　A　P

〔カードVI〕

①(Per.) 15″ ∧ドジョウのつぶれたもの(D_2)。(Inq.)ヒゲがでてて。やっぱりトラックみたいのにつぶされてグシャッとなっている。30″

D　cF∓　A

≪M≫

①(Per.) 25″ ＞ これも同じよう，敷皮みたい。(Inq.) 上から見たところ，頭，足，表っ側。40″

W　Fc±, FK　Aobj　P

〔カードVII〕

①(Per.) 5″ ∧ 人と人との会話。(Inq.) 頭(d_3)，目，鼻，口，身体(D_2)，足(D_1)。(どんな人?) やさしい人。(どんな会話?) 友だちのこと話している。(この2人友だち?) そう！15″

W　M±　H

≪M≫

①(Per.) 10″ ∧ 子どもみたいね。(Inq.) 全体から見たら，子どもの胴体みたい。これ顔(d_3)。(漫画が好きだからかな?：母)

W　F±　H

②(Per.) ∧ 動物の顔(D_2)。(Inq.) 目があって歯があって，下を見て睨んでいる。キーッとしているかんじ。40″

D　FM±　Ad

〔カードVIII〕

①(Per.) 15″ ∧ カイジュウ(ヒラメカイジュウ)。(Inq.) ここのところがペチャンコになっている。全体で。ペタンと地面に平らになって寝っころんでいる。30″

W　FM∓　A

≪M≫

①(Per.) 15″ ＜ 虎みたいなかんじにも見えるし。(Inq.) 赤いとこ(D_1)虎がのっしとしているよう。あとは分からない。なんにもかんじない。1′

D　FM±　P

〔カードIX〕

① (Per.) 25″ ∧犬 (D_1)。(Inq.) 顔，シッポ。一匹しかいなくて，水を見たら影に映ったの。ここの黒いとこ目，口さけてる。歩いている。足はこっちしか見えない。ここが足だとすると水に映ってないとおかしい。45″

D　FK±,FM　A,Water

≪M≫

① (Per.) 40″ ∧ バイオリン (D, S) みたいにも見えるし。あとなんだろう。何に見えるのかしら。バイオリンが隠れている。(Inq.) 軸 (D_8)。なんとなくバイオリン。こっちからみて（テスターの方から見てと指さす)。 1′10″

D,S　F±, FK Obj

〔カードX〕

① (Per.) 5″ ∧ カニ (D_3)。(Inq.) これは (D_4) なんか，棒 (D_{14}) に2人くっついている。

D　FM±　A,Obj　P

② (Per.) ∧ ざりがに ($D_{11}+D_6$)。(Inq.) 上のカニを襲おうとしている。ここんとこが，ハサミというか，そういうかんじ。

D　FM±　A

③ (Per.) ∧ 葉っぱ (D_{13})。(Inq.) 葉っぱって全体的に丸いのもあるし，ちぎれて全部ないのもある。それに緑だから。

D　FC±　P l

④(Per.) ∧ こうもり。(Inq.)ここが(D_8)。やっぱ羽で飛んでる。40″

D　FM±　A

≪M≫

① (Per.) 15″ ∧ アニメに出てくるような動物に見えるわね。何かしら，動物が角つき合わせてる。あとは分からない。(Inq.) ここ (D_3) テレビでみたバイキンのよう。角つき合わしている。1′3″

D　FM±　(A)　P

S・Aはmost liked cardにXカード（色んな動物がいてカラフル，奇麗)，self cardにも同様にXカード（自分はカニみたい）を選んでいる。さらに母親はS・AカードとしてXカード（色々な色がでて不安定だから）を選んでいる。このように，本症例では，S・Aが自分自身をどうイメージしているかと，母がS・Aをどうイメージしているかが見事に一致しているのが特徴的である。このことは，母のS・Aに対する理解がかなり正確なのではないかということを予想させる。また，これがmost liked cardとも一致していることから，S・Aは自分自身を肯定的にみているのではないかと思われる（CATのところでも触れたようにS・Aの人生観はかなりポジティブなものなのだろう)。

父親カード，母親カードについては，普通両カードとして選ばれ易い[8]IVカード，VIIカードがそれぞれ選ばれている。父親カードについては「怖そうだけど，強くて頼りがいがある（IVカード)」，母親カードは「女の子らしい。人間っていうかんじ（VIIカード)」とその理由がのべられている。したがって，S・Aの両親像は極めてノーマルなものであると考えられる。ところで，S・Aはmost disliked cardにIVカード（ちょっと真黒で何がなんだか分からない。怖そう。足が大きくて，かっこ悪い）を選び，その理由として「わけが分からず，怖い」とのべている。これはS・Aの父親に対するイメージの一側面を表わしていると思われる。生育歴の中でも，S・Aが父を怖がっているとのべられていたことが思い出される（ちなみに，S・Aは兄について「犬って強いけど噛むしか能がない（カードIX)」とのべて，男性に対する否定的なイメージをもっていることを示唆している)。しかしこの面についても，「こわそうだけど，強くて頼りがいがある」と肯定面が増えつつあるように思われる。さらにつけ加えると，母は兄について，「やさしそう，身体大きくて象みたい」というイメージをもっているが，推測するに，S・A

の家族内の男性はS・Aからみると分かりにくい面を多く持っているにせよ，基本的には優しい人々なのではなかろうか？

一方，母親は自己カード（self card）に「やさしそう（カードIII）」というイメージを持っているが，S・Aに対する母親の態度には，（たとえ現在忙しく，十分に構ってあげられないにしても）基本的には「優しさ」が支配的であるとみてよいと考えられる。またXカード（S・Aカード）に対する判定（イメージ）から判断するに，S・Aの不安定さも，正しく見ぬいているように思われる。

III. 母子それぞれのロ・テスト反応からみた母子差とイメージの母子相互作用

A. サイコグラムからみた母子差

Fig. 3 に母子のサイコグラムを示した。またTable 2 に母子の量的比率をしめしてある。( )内がS・Aのものである。Fig. 4 からみてとれるのはまず，①母子ともに内向的であり，FMが圧倒的に多いということである（母：FM＝6，子：FM＝9）。この傾向は特S・Aにおいて著るしい。S・AのA％は88％であるが，これは同年代の平均（10才＝49～58.8％）[9]に比較して著るしく高いことが分かる。この2つの事実からみて，S・Aはそのパーソナリティの中に「より未成熟で，より無意識的で，基本的衝動のより受容しがたい部分」[7]をもっていると考えられる。この傾向は母親においても同様にみられるが，S・Aの方により顕著である。このような母子関係にあっては，両者のコミュニケーションは衝動的で，コントロールを欠いた，深みのないものになってしまう恐れがあるのではなかろうか？事実，S・Aは機関銃のように早口でお喋りである割にはいつも何かしゃべり足りないような不安をもっているのである。次に，②c反応（Fc，cF，c）についてみると，S・Aは1個，母は2個ある。S・Aは適当数のc反応をもっている（10才の平均で0.74～3.00個）[9]と思われるが，その内容を詳しく検討してみると，その言語化において今ひとつ明瞭さを欠いている。例えばカードIVの反応①は単につぶれたと表現されているのみであるが，もう少し濃淡のかんじが言語化されていればFcとなるものである。cを「他人および自身の，愛情欲求の受容と認知を示す」[7]とみるならば，S・Aにはその母親との間の感受性の表現において，今一歩明瞭に言語化されていない部分が多いのではないかと思われる。潜在的には両者共に愛情に対する質がよいにも拘らず，それが言語化されていないために，S・Aのいうように，「何かいつも，喋ってない（伝ってない）ような気がして」しまうのではなかろうか？ちなみに，S・Aのc反応は「つぶされてグシャッとなっている（カー

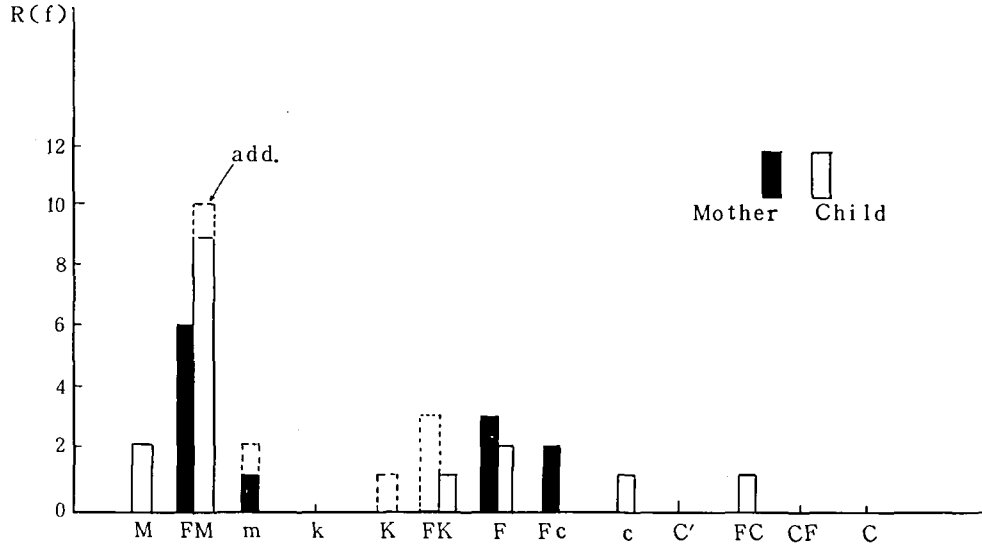

Fig. 3 母子のサイコグラム

Table 2 母子のスコアーのまとめ

Summary Scoring Table

R (total response)	12* (16)	W : D		6 : 5 (6 : 10)	FC+CF+C : Fc+c+C	0 : 2 (1 : 1)
Rej (Rej／Fail)	0 (0)	W %		50 (37)	FM : M	6 : 0 (10. 5 : 2)
TT (total time)	8′ 23″ (6′ 40″)	D d %		0 (0)	F%／ ΣF%	25／100 ((12／100)
RT (Av.)	50″ (25″)	S %		8 (0)	F+%／ΣF+%／R+%	100／100／100 (100／88／88)
R1T (Av.)	16″ (17″)	W : M		6 : 0 (6 : 2)	A %	58 (88)
R1T (Av. N. C)	12″ (15″)	E.B	ΣC : M	0 : 0 (0.5 : 2)	At%	0
R1T (Av. C. C)	20″ (19″)		Fc+c+C′ : FM+m	2 : 6 (1 : 9.5)	P (%)	7 (58%) (4 (25%))
Most Delayed Card&Time	IX 40″ (II & V 30″)		VIII+IX+X／R	25% (38%)	Content Range	4 (4)
Most Disliked Card	VII (IV)	FC : CF+C		0 : 0 (1 : 0)	Determinant Range	4 (6)

*上段 母 下段（ ）内 子

ドVI)」というものであるが，そのイメージはいかにもネガティブなものであるように思われる。

全体としてみると，本症例の母子関係はR(反応数)も母子それぞれに12, 16と似かよっているばかりでなく，サイコグラムからおおよその傾向をみる限りでは非常に共通性の高いものであると結論できそうである。

B. 量的比率からみた母子差

Table 2からいくつかの特徴をひろってみる。まず，①母親において，無色彩カードと色彩カードの初発時間に8秒の差がある。これはIXカードの初発反応に40秒もかかっていることに特徴的にあらわれているが，(イ)母にFC反応が1個もみられないこと，(ロ)VIII+IX+X/Rが25%であることなどから推測するに，色彩のまとめ方が特に母親においては苦手なことの表れであると思われる。しかし，40秒かかってしまったとはいえ，色彩の中に潜んでいる"バイオリン"をイメージできたことはなお，母親の潜在的な統合力を期待させる。次に，②母親にS%が8%認められる。これはカードIIの空白部分を"電気の傘"とみたものである。これは形態水準もよく，「環境に対する豊かな反応性」[7]を示唆していると思われる。これに関連して，S・Aの母親の反応には「～にもみえるし」「～にはみえないね」「～とみると可愛いけど」といった類の反応の仕方の多いことが特徴的である。このことは，S・Aのイメージを推測し，判断し，共感する場合の，母親の側のレパートリーの広さとして有利な点である。S・Aの母親はこのように，相手のイメージ世界に対する共有能力が高いのではないかと考えられる。さらに，③P%についてみると，母親のP%=58%はかなり高いが，これも子どもの反応の推測能力という点からみるならば，推測のよさや共有しうるイメージ世界がより多くなることを予想させる（この場合，子どものイメージがあまりに独創的であった場合，母親の平凡なイメージではついていけなくなる恐れがあるが，S・Aの場合P%が25%とやはり平均的であるので，母親のP%の高さは利点になると思われる。すなわち両者ともに公共性の高いイメージ世界を持っている）。

以上，A，Bにおいていくつかの特徴をあげたが，その結果次のことが明らかになった。つまり，①S・Aと母のロールシャッハ反応には共通性が高いこと，②母親の側の潜在能力，反応レパートリーの広さ，イメージ世界の共有能力の高さなどいくつかの点から判断して，子どものロールシャッハ反応のi)推測，ii)判断，iii)共有・受容能力がS・Aの母において良好であろうと予想されるのである。

IV. ロ・テスト反応の推測能力，判断能力，共有能力について

これまで母子の反応そのものと，その差，共通性についてみてきた。しかし，母子のロ・テストの差をみるだけでは，確かに母子をそれぞれ別個の存在として独立させた上で，個人としてのロ・テスト反応をみた場合よりは幾分進歩しているとはいえ，イメージの母子相互作用の側面にまで立ち入る視点を得てはいない。イメージの母子相互作用について考察するためにはいま一歩，歩を進め，子どもの（または母の）イメージ世界を母（または子ども）がどう見ているかというところまでいかなければならない。そのような視点を得て初めてイメージの側面からみた母子の相互作用が見えてくると思われる。

筆者は母親が本人をどれくらい理解しているかをみるために，子どものロ・テスト反応を推測してもらった。推測にいくつかの段階をもうけた（Table I）。①何もヒントを与えずに自由に推測してもらう段階（free response の段階），②反応内容

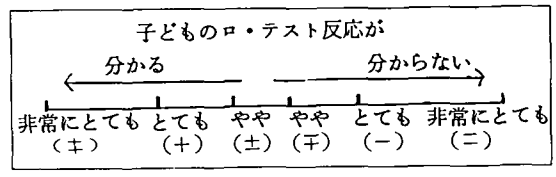

Fig. 4　推測能力の6段階評価

（何をみたか）のみ教えてそれを説明できるかどうかみる段階（suggestion の段階），③反応内容の領域，内容の細かい説明をしてそれが理解できるかどうかをみる段階（explanation の段階）。①→③に進むにつれて，母の推測能力が低いことを意味する。結果を分かる(＋)と分からない(－)に大別し，それぞれをまた3段階に分けて評定した。全体で6段階の評価になる（Fig. 4）。結果は＋（$\overset{+}{\pm}$，＋，±）に評価されたものが，①段階目0個（0/16），②段階目12個（12/16），③段階目2個（2/16），－（∓，－，＝）に分類されるものが2個残った（Table 3）。この2個についても母は「そうかもしれない」「あんまり見えない」と幾分はそのようにも見えるとのべていることから，③段階目までにはほとんど全て

Table 3　母→子の推測

Card	No.	free response	suggestion	explanation
I	①		＋	
II	①		±　（そういわれれば）*	
	②		＋　（ナメクジ！）	
III	①	（向い合っている人間）	±　（鳥を見た点では同じ）	＋
	②		－	±
IV	①		∓　（私はひっくり返したので）	＋
	②		＋	
V	①	（コウモリ）	＋	
VI	①		－	∓（そうかもしれない：どじょうが潰れたというのが分からない）
VII	①	（女の子）	＋	
VIII	①		＋　（テレビの見すぎだわ！）	
IX	①		＋＋（母が方向を示す：テリア）	
X	①		±　（宿借りみたいなものかしら）	
	②		－	∓（あんまり見えない：ざりがにに）
	③		＋　（よく分かる）	
	④		＋　（よく分かる）	

＊（　）内は母の反応あるいは反応の説明

の反応を子どもと共有できると結論できる。

この手続の中で目に留ったことを以下のべる。

①カードIIの〝ナメクジ〟について，母親はゲラゲラ笑いながら，「あの娘みたことあるかしら，ナメクジにシマシマなんかあるかしら」と，S・Aのプロトコルでは言語化されなかった「シマシマ」という濃淡反応をみせた。この点，母親はいかにも楽しそうにS・Aの反応を受け入れ，さらにそれを明細化できていることが特徴的である。カードIVの〝タヌキ〟という反応に対しても，母親はカードIIに引き続き，再びいかにも可笑しそうにゲラゲラ笑いながら受け入れた。次に，②IIIカードの〝背伸びしているダチョウ〟を，初めよく了解できないようであった。この点，母親にはS・Aが多少背伸びしている部分がよく理解できていないのかも知れない。〔このカードに対して，母親は①段階目(free response)で，向い合っている人間という人間運動反応(M)をS・Aがみたのではないかと推測しているが，このようにM(共感能力を示すM)への可能性をも孕んでいるカードにおいて，S・Aの対人関係での「背伸び」を理解しにくいということはとりわけ重要なことであるように思われる。〕ところで，カードVIIはS・Aにとって数少ない人間運動反応(M)のでているカードである。このカードはS・Aにとって，やさしい友人2人が会話しているという快適なカードでもある。このカードに対して母親も唯一の人間反応Hを示しているが，ひるがえってS・Aの反応推測においても，suggestion段階で非常によく見えるとの事であった。以上のことから，母親はS・Aの〝背のび〟しているという側面にまでは気づいていないにしても，やさしく話し合っているという現実的な対人関係の側面については十分に了解していると考えられる。さらに，③IXカードの〝犬〟という反応を，筆者はよく理解(共感)できていなかった。しかし，この反応に対して母親は正しく方向を示し，筆者に「それはテリアだと思う」と明細化してくれた。S・Aは犬が嫌いなのだという事実もこのとき母親に教えてもらった。S・AはカードIXを兄カードとして選び，「噛みつくしか能がない」と否定的に評価しているが，このようなS・Aの〝恐れ〟に対する共感能力も，この母親にあってはかなり高いのではないかと思われる(ちなみに，このIXカードを40秒(most delayed card)という長い熟考の後，母は〝バイオリン〟とみているが，バイオリンがまさに共鳴(共感)により調和した音を発し，上手に弾くことがかなり難かしい楽器であることを考え合わせると，この2人のある種の母子関係が示唆されているようで大変興味深い)。最後に，④母子ともに平凡反応Pを示したカードについてはいずれも共有し易いようである〔e.g.カードI(S・A：チョウチョ，母：蛾)カードV(S・A：チョウチョ，母：蝙蝠)，カードX(S・A：カニ，母：バイキン)〕。

母子反応同質性指標（SMC）の提起

先の報告[3)〜6)]では，母の側から行う推測の3段階を連続体とみていたが，これはいく分質の違うものであるということについて，筆者は〝はじめに〟でふれた。ところでこの3段階，とりわけ①段階(free responseの段階)での推測能力の根底には，もう一つの大きな要因として，もともとの母子の反応がどれくらい似ているのかということがある。母子のロールシャッハ反応の同質性がどれ程なのかを考察するための手掛りとして，母子反応の同質性指標(Similarity of Rorschach Responses between Mother and Child:SMCと略記)を提起したい。Table 4にSMCの採点法を示した。Table 5にはS・Aの症例について，Table 4の採点法にしたがってスコアリングした例がしめしてある。母子の反応が完全に一致した場合5ポイント，完全に一致しない場合はポイント1が与えられる。その間にいくつかの段階がある(Table 4)。S・Aの例(Table 5)の各反応についてのポイントを合計すると32ポイントになる。S・Aの反応数R＝16であるのでSMCは以下の様になる。

$$SMC=\frac{\text{子どもの各反応のポイントの合計点}}{\text{子どもの全反応数（R）}}=\frac{32}{16}=2.00$$

具体的な手順としては，子どもの反応を中心にする。また，当刻カードの子と母の反応数が等しくない場合は，母の反応の区別は無視して，母の反応の中に子どもの反応と一致したものがあるかないかでスコリアリングしていくことにする。したがって，母の反応は2度以上重複して使用される可能性がでてくる。そうすると，母親の反応数が多ければ多い程，SMCの得点は上昇する可能

性が高くなる。それ故この点を考慮して，修正SMC（⊿SMC）を採用することにした。

$$\Delta SMC = \frac{\text{子どもの各反応のポイント合計}}{\text{子どもの全反応数（R）}} \times \frac{\text{子どもの全反応数(R)}}{\text{母親の全反応数(MR)}} \quad \text{-----(1)}$$

Table 4　母子同質性指標（SMC）の得点スケール

ポイント	スケール	
5	完全に同じ反応である。	e. g. 母，子：蝶々が飛んでいる。（カードⅠ）
4	一致していないが似ている。 （例えば2つとも平凡反応である。）	e. g. 母：蝶々，子：蛾（カードⅢ） 母：バイオリン，子：三味線（カードⅥ） 母：蠅の顔，子：カマキリの顔（カードⅢ）
3	部分的に一致しており，一致している部分が大きい。	e. g. 母：女の子が2人で話している。 子：ポニーテールの女の子が岩の上に乗っている。 （カードⅦ）
2	部分的に一致しているが，いまだ一致していない部分が大きい。	e. g. 母：鳥が話し合っている。その間を蝶々が飛んでいる。 子：2人の人間が太鼓を叩いている。その間を蝶々が飛んでいる。 （カードⅢ）
1	まったく違う反応である。	e. g. 母：鬼が笑っている。 子：象が鼻をくっつけている。 （カードⅡ）

Table 5　症例S・Aの母子同質性指標得点

Card	No.	Point
Ⅰ	①	4 (P)*
Ⅱ	①	1
	②	1
Ⅲ	①	3
	②	1
Ⅳ	①	1
	②	2
Ⅴ	①	4(P)
Ⅵ	①	2
Ⅶ	①	3
Ⅷ	①	1
Ⅸ	①	1
Ⅹ	①	4 (P)
	②	2
	③	1
	④	1
Total		32**

*平凡反応

**

$$\Delta SMC = \frac{\text{子どもの各反応のポイント合計}}{\text{子どもの全反応数(R)}} \times \frac{\text{子どもの全反応数(R)}}{\text{母親の全反応数(MR)}}$$

(1)の公式にしたがってS・Aの⊿SMC$=\frac{32}{16}\times\frac{16}{12}=2.66$と指標化される。本稿ではS・Aの⊿SMCのみ求めたが，後日，先の報告の症例をも合わせて⊿SMCの比較検討を行いたいと思う。

S・Aの⊿SMC＝2.66はかなり高い一致度ではないかと思われる。このような同質性の高低にもとづいてさらに今後考察を深めていきたい。

Ⅴ．ロ・テストの反応内容からみたイメージの母子相互作用

ここでは，イメージの形式面ではなく，内容からみた相互作用についてふれる。いくつかはⅣでも示唆されたものである。S・Aのイメージを A 潰れた・ちぎれた・背のびした・くねったというイメージ，B　食べる・喋るというイメージ，C ロがさけている（噛みつく）・襲うというイメージに分けて考察する。さらに母親の，D　アレンジする・上から見る・後から見る・隠れているというイメージについても考察したい。

A　潰れた・ちぎれた・背のびした・くねったというイメージ

S・Aのイメージはいわゆる潰れてペチャンコになったというものが多い。これは多少，保続の傾向すら思わせるほどに続いている。テスト状況での印象では，S・Aがみつけたひとつの適応形式が多少とも固執されているのではないかと思われた。ペチャンコのこうもり(カードII)，つぶされたタヌキ(カードIV)，トラックにつぶされたドジョウ(カードVI)，ペチャンコのヒラメカイジュウ(カードVIII)など16個のうち4個みられる。またカードVに「とぎれている蝶」，カードXに「ちぎれた葉」というイメージが言語化されている。これらのイメージはS・Aの生育歴や現在の状態などからみて，S・Aの深層に横たわっている被圧倒感，不全感を象徴しているのではないかと思われる。特に「潰れた」というイメージは，いわば「ふわふわした」というイメージの対極にあると思われるが，世界に対するS・Aの「ふわふわした」イメージを否定するものとして重要である。また，S・AはカードIIに「背のびしたダチョウ」というイメージをみているが，これは頭の中でひっくり返して見たのだという。S・Aが，実際にカードを手にとって回転させたのではなく，頭の中で回転させたという事実は大変興味深い。つまり，環境に過度に適応しようとする「背のびした」S・Aの姿勢は，それだけより意識的なものではないかと思われる。S・AはカードIIに「くねって遊んでいるナメクジ」というイメージを見ているが，いかにも部屋の片隅みでひっそり遊んでいるS・Aの姿を髣髴とさせて面白い。この反応をみて母親はゲラゲラ笑いだしてしまった。どのような理由で笑ったかは定かでないが，片隅で必死にくねって遊んでいるナメクジの姿はほほえましい。

以上の反応はS・Aの内面的な自己像をいくつかわれわれに暗示する。

B　食べる・喋るというイメージ

CATの反応で，S・Aに口唇的な，食べる・喋るという反応が非常に多かったことを思い出していただきたい。このことはロ・テストのイメージにも共通していた。例えば，「チョウチョを食べようとしている」「鳥が向き合って話している」(カードIII)，「人と人との会話，友だちのこと話している」(カードVII)などである。カードIII，VIIともに人間運動反応がでやすいカードであるが，それだけなおさら，このイメージはS・Aの対人関係における口唇的な欲求を感じさせるものである。特に鳥はチョウチョまで食べてしまおうとしているが，蝶を振れ動く「人間の心」[10]と考えるならばまさに心まで貪り食ってしまおうというすさまじさである。ただし，VIIカードの人は「やさしそうな人」なのだという。したがって，おしゃべりなS・Aはこの「話す」という行為を通して代理的ではあれ，口唇的欲求を満たしているのではなかろうか？一方母親の側からみると，S・Aが「鳥が話している」とみたIIIカードを母親はmost liked cardに選んでいる。かつ，母親はこのカードをself cardとしても選んでおり，自己評価として「やさしい」というイメージを自らに与えている。鳥はくちばしで(せかして)つつくという意味で母の象徴ともとれるが，母自身は「やさしそう」と思っているこのカードを，S・Aは多少否定的にみているのかも知れない。

C　口が裂けている(噛みつく)・襲うというイメージ

カードIXは，この2人の母子関係をみていく上でとりわけ重要なカードである。小此木ら[11]は「咬む，裂く」というイメージを「口愛期的攻撃」とみなしているが，カードIXの犬イメージもまさにそのようなものである。この犬は母の説明によればテリアなのだという。同時に，S・Aはこのカードに兄のイメージを見，「噛むしか能がない」と否定的なイメージをもっている。カードXのカニは下のざりがにに「襲われよう」としているのだという。カードXのカニはS・Aによって自己像(自分はカニみたい)として選ばれていることを思い出していただきたい。カニは「意外に臆病で，硬い殻はその奥に傷つきやすいやさしさを秘めている」[10]とするならば，これらのイメージは，S・Aのある種の被害感，あるいは対人的恐怖心を表しているのではないかと考えられる。

(ところで，カードIXの"犬"は自らの影[12]を水の上に映している。この影をS・A自らの影の部分であると考えることも可能である。とするならば，この攻撃的な犬はもし

かしたら，S・A自らの抑圧された攻撃性を表しているのかもしれない)。

これを母親の側からみると，母親はこういったS・Aのイメージをよく理解しているようである。カードIXの犬のイメージに対しては，それがS・Aの怖がっているテリアであると熟知していた。また，このカードは母親にとって最も統覚の遅れたカード（most delayed card 初発時間40秒）でありながら，その奥に〝バイオリン〟が隠れているという良好な形態を見い出すことができた。バイオリンが演奏の難かしく，かつ，共鳴（共感）することによって初めて妙なる音を出す楽器であることを思い起こすならば，この反応（イメージ）はとりわけ印象深いと筆者には思われる。

さらに，母親はS・Aが「襲われる」とイメージしているXカードをS・Aカードとして選び，「色々な色がでて不安定」と評定している。母親はS・Aの不安定さが何に由来するものかまでは分からないにしても，そこに何か問題があることには気づいていると考えられる。

D　アレンジされた・上から見る・後から見る・隠れているという母親のみたイメージ

母親の反応（イメージ）については上のA～Cの中でもふれたが，ここでは，母親の，対象をやや客観的に対象化してみていると思われるイメージについてふれる。例えば，「人間的にアレンジされた家鴨」（カードIII），「上から見た敷皮」（カードIV），「後から見た蝙蝠」（カードV），「検査者の方からみた，隠れているバイオリン」（カードIX）などがそれにあたる。このような反応は，母親の側に，S・Aよりも対象を距離をおいて客観的にみる冷静さが備っていることを示しているように思わせる。特に，カードIXの〝バイオリン〟について説明する際，母は明らかに筆者が理解しやすいようにという思いやりから，方向を示してくれた。S・A，母親ともにFMが多いにしても（S・A＝9，母＝6），母の方がいくぶん少ない。FMが，「より未成熟で，より不安定で，より衝動的な」[7]パーソナリティの指標であるとするならば，母の方によりこの傾向が少ないことから判断して，この点に関しても母の方に一日の長があると思われる。

以上，本症例の母子関係においてはさまざまの差異点を内蔵しつつも，同質性が高く，母親の子どもに対する共感能力も優れていることが見てとれよう。

ま　と　め

心因性頭痛と診断された10才女児について報告した。患児は退院後，症状がすみやかに消失し，一年後の今日でも再発をみていない。本報告では，このように症状がすみやかに消失した理由について，母親の患児に対する理解力が良好であるという仮説をたてた。イメージの側面からこの二人の相互作用を検討すべく，ロ・テストを利用した。手続は，①患児にロ・テストを施行する，②母親にロ・テストを施行する，③患児のロ・テスト反応を母親に推測してもらうという順序で行なった。③をさらに，i)何もヒントを与えずに自由に推測してもらう，ii)反応内容のみ教えてそれを説明してもらう，iii)反応内容の領域，内容の細かい説明をしてそれが分かるかどうかをみるという3段階に分けた。この3段階は正確にいうと，母親が子どもの反応（イメージ）を，i)推測し，ii)判断し，iii)受容・共感するというプロセスに対応しているもので，それぞれ質の異ったものであると思われる。今回は新しい試みとして母子反応同質性指標（SMC）を導入した。これによって，母子の反応がどれくらい似ているのか否かが数量化された。本症例についていうとSMCは非常に高いということが分かった。この同質性の高さを基礎にして，患児に対する母親の反応をみると，①サイコグラムが似ており，また②母の推測能力，判断能力，共感能力ともにすぐれており，③イメージの母子相互作用は共有性の高いものであることが明らかになった。

今後，先の報告も含めて，この方法を精密なものに改良していきたい。

謝辞

最後に，症例の公表を許可して下さった東京慈恵会医科大学小児科教授前川喜平先生に感謝いたします。また，日頃の御指導に記して感謝申し上げます。

引 用 文 献

1） 井原成男：イメージの母子相互作用(1)
—Exchange Rorschach Methodの試み—．日本教育心理学会第24回総会発表論文集，1982.

2） 吉本隆明：フロイトおよびユングの人間把握の問題点について（知の岸辺へ），弓立社，1976.

3） 井原成男：アノレクシア・ネルボーザ症例におけるロールシャッハ・テストの母子差と治療への適用．日本心理学会第43回大会発表論文集，652，1979.

4） 井原成男：ロールシャッハ・テストの母子差と治療への適用，ロールシャッハ研究，Ｖｏｌ．ＸＸIII：145－158，1981.

5） 井原成男：ロールシャッハ・テストからみた母子相互作用(1)．日本心理学会第45回大会発表論文集，633，1981.

6） 井原成男：ロールシャッハ・テストからみた母子相互作用—ある夜尿児の症例研究—．長野大学紀要，Vol. 3，No.3・4：19－33，1982.

7） Klopfer,B.& Davidson,H.H.（河合隼雄訳）：ロールシャッハ・テクニック入門，ダイヤモンド社，1964.

8） 片口安史：新・心理診断法，金子書房，1974.

9） 小沢牧子：子どものロールシャッハ反応．日本文化科学社，1970.

10） 秋山さと子：夢解きのマニュアル（別冊宝島　夢の本）．ＪＩＣＣ出版局，1979.

11） 小此木啓吾・馬場礼子：精神力動論．医学書院，1972.

12） 河合隼雄：影の現象学，思索社，1976.